

美濃路が通る橋

伝馬橋

一日に何台もの車が通り過ぎてゆく桜橋と錦橋にひきかえ、その中間にある伝馬橋は、車の通行も、人の往来もまれだ。

今でこそ通る人もまばらな伝馬橋であるが、江戸時代は美濃路を行きかう人が絶え間なく通る橋であった。東海道は、宮の宿より海路7里、桑名に通じている。美濃路は、名古屋の町を通り、伝馬橋を渡り、垂井まで通じている道だ。垂井で中仙道と合する。参勤交代の大名行列、お茶壺道中、朝鮮通信使も、この道を通った。

伝馬橋を渡り、東に歩いてゆくと本町通りに突きあたる。ここに、人馬継立を扱う問屋場があった。清須までは2里半、熱田までは1里半の行程であった。

また、ここには高札場こうさつばが設けられていた。一般に高札場は、木柵で囲った中に地上3メートルを超える列柱を立てて、法度や掟書はつと おきてがきなどを書いた板札を掲げ人々に周知させる施設だ。

美濃路を通る旅人は、伝馬橋を渡ると名古屋の街に入ったという感慨に浸ったであろう。

『尾張名陽図会』は、伝馬橋を「往来の貴賤絶間なく賑しき所也」と記し、多くの人々が橋の上を往来している図を描いている。橋の際には、無数の材木が立てかけてある。堀川には何隻もの船がもやっている。

この図のように、伝馬橋の東岸には、材木屋、竹屋、薪屋が多く軒を並べていた。町名も、中橋から伝馬橋の間の東側の地は、下材木町と呼ばれた。



伝馬橋 (尾張名陽図会：鶴舞中央図書館蔵)

ざいそう材穂と呼ばれる豪商、鈴木惣兵衛は、伝馬橋の近くで商売をして、財をなした人だ。

時は移り、大正時代の初め、伝馬橋の西南角に、行列のできる饅頭屋が店を出した。テントの小屋掛けで、4、5人座ればいっぱいになる小さな店であった。小麦粉やきみょうぼんに焼明礬、重曹を入れ、自家製の餡を入れて蒸した饅頭は、馬糞饅頭と呼ばれた。

戦前の伝馬町は、その名の通り、馬糞を専門に拾う人がいるほど、馬が多くいる町であった。

蒸饅頭の色とかがちが馬糞に似ているので、馬糞饅頭と呼ばれたのだ。戦前は2銭、戦後は10円で売っていたという名物の蒸饅頭屋も、昭和30年に店を閉じて、この地にはない。

美濃路にかかる伝馬橋は、多くの人がゆきかい、さまざまなドラマが生まれた橋だ。



大正9年の伝馬橋 (『建設の歩み』愛知県土木部発行)



盆中灯籠 (名古屋名所団扇絵集：名古屋市博物館蔵)



伝馬橋